



平成24年度 春季講座 第4回要旨

『鎌倉の禅宗』

講師：三浦 勝男さん(前鎌倉国宝館館長)

とき：平成24年7月7日(土) ところ：鎌倉芸術館

◎鎌倉に禅宗が根付いた経緯

禅宗を考える上で、鎌倉の政治的、地理的位置は重要である。源頼朝は、京都で政治権力を握っていた公家の政治ではなく、武家を中心とした政治をするために、背後に天皇をいただき権力を発揮したいという考えで、関東を中心として奥州までの範囲内を治めることを主張し、鎌倉に幕府を立ち上げた。それは、関東武士たちの拠点で鎌倉であったこと、そして歴史的な源氏の拠点として鎌倉が大事な場所であったという2つの大きな要素があった。

鎌倉の禅宗寺院は、鎌倉市内の中央部には少ない。ほとんどが、いわゆる鎌倉の山を一つ越えた山ノ内地区である。北条氏が禅宗を鎌倉に持ち込む以前の実朝までの鎌倉の陣形は、永福寺等がしっかりと残っていたため、新しい教えである禅宗の寺院を建てる広い土地がなかった。そのため建長寺は、八幡宮寺裏手の側面を造成しながら建てられた。北条氏は金に糸目を付けず、中国から建長寺に蘭溪道隆を呼び寄せた。江戸時代に作られた「禅宗読本」の写本には、当時の様子が、「言葉は通ぜず、ことごとく手振り、足振り」と書かれている。このような形で、日本で最初の禅宗寺として、建長寺が建てられた。

また、建長寺と円覚寺は、五山の第一、第二としての誇りもあり、現在とは異なり犬猿の仲であったということまで江戸時代の古文書には出ており、良い意味で競っていた様子がうかがえる。同じ臨済宗であるが、その流派、考え方、やり方が少しでも異なると、相容れなかったことが読み取れる。

◎開基の力

寺院において、第一世の老師である開山や、資金面で全面的に負担する開基が誰であるかは重要である。寺を建てると決めた開基は、建立費用だけでなく、そこに勤める禅僧の食いぶちまで全て面倒を見なければならない。建長寺で1年間にどれだけの米を消費したかを調べ、禅僧一人一日で1合半食べていることから計算すると、建長寺の禅僧は最も多い時期には100人を超えていたことがわかる。それらを全て支援する財力を

持つ人物は、政権を握るくらいの立場の者以外には考えられない。

鎌倉時代は、頼朝から始まる源氏三代と北条氏の政権の間に、少なくとも146ヶ寺が建立されている。北鎌倉を含むこの狭いエリアにこれだけの寺院がどのように運営されてきたのかは、少しずつ解明されてきている。禅僧達は、畑の耕作をして、自分たちの最低限の食物を得ていたが、本当の意味で寺院を支えていたのは、いわゆる檀家であったということが古文書等の記録に残っている。

◎北条政子の功績

頼朝の死後、二代目将軍頼家になると、その母北条政子が実質的に権力を持つようになる。そのような中に鎌倉五山第三位となる寿福寺を女性である政子が開基となり創建したことは、鎌倉の歴史や、仏教史の上で、大きな意味合いを持つ。鎌倉時代当時の女性の社会的地位を考えると、北条一族の権威と血脈、そしてそれを背負って政治の世界でそれなりの実力を発揮したことが揃って初めて実現したことであろう。政子は、実質的な将軍職を務める傍ら、幕府ではできないことを寿福寺でおこなっていた。最近の女性史研究の中でも、鎌倉時代の特に中期以降の女性の活躍は注目されている。

◎鎌倉にとっての禅宗

鎌倉における禅宗の発展を見て行くには、寿福寺の歴史が重要になるが、残っている記録が少ない。江戸時代に寿福寺の僧侶によって書かれた日記帳が残されているが、今後これを読み解くことによって解明されることが出てくることを望まれる。

この鎌倉五山等々を発展させた、特に、北鎌倉を中心とする禅宗寺院の基礎を、しっかりと、鎌倉を拠点に関東に発展させたという意味では、北条氏の功績は偉大であった。

今後は、鎌倉文化を考える大きな要素として、宗派を超えて北鎌倉地域を中心とした禅文化を考えていけば、もう一つの新しい鎌倉地方文化を極めることができるのではないかと考えている。